新世界のための競争とイギリスの膨張

第39巻《帝国主義論ノート》　1915－1916年に執筆
ノート〈マルクス主義と帝国主義について〉P628-630

シーリ《イギリスの膨張》

《イギリスの膨張》　文学修士Ｊ．Ｒ．シーリ著.

〈18 世紀と 17 世紀におけるヨーロッパ諸国家の根本特徴はあまり注目されていないが，この根本特徴とは，五つの西欧国家のどれもが新世界に自分に属する帝国を持っている点にある.17 世紀以前には，この状態はようやく形成されはじまったばかりであり，18 世紀以後にはこの状態はもうなくなった. コロンブスの発見の巨大な, はかり知れない結果は, きわめて徐々に作用をおよぼしていったので，16 世紀全体がすぎさったのちにようやくこれら民族のたいていのものは，新世界に自分の割りまえを要求するために努力しはじめた．この世紀の終わりごろまでには独立オランダはなくなり，まして大オランダなどはとうていありえなかった．この世紀にはイギリスもフランスも植民地を獲得しなかった．フランスはもちろん，フランスのシャルル九世の名まえにのっとって名づけられたカロライナがいまでも証明しているように，北アメリカに植民地を設けようと計画した．しかし，近隣のフロリダにいたスペイン人は，これを妨害するために干渉した．……　このようにして新世界は，ほとんどこの世紀全体をつうじて，これを開発するために全力をつくしてきた二つの国家，すなわちスペインとポルトガルの所有となっており，そのさいスペインはアメリカを，ポルトガルはアジアを主として眼中にいれていたのであって，しかもそれは二つの国家が 1580 年に 60 年間も存続した連邦を形成するまでそうであった．オランダ人は 1595 年から 1602 年までの 7 年間に帝国建設のための広範な闘争をはじめた．フランスとイギリスがこれにつづいたのは,17 世紀の初年，すなわち，われわれの国王ジェームズ一世の治世のときであった.

これに反して 19 世紀には，これら五つの国家の闘争は，新世界では終わった．それはつぎの二つの理由から終わったのである．つまり，大西洋のかなたの植民地が本国から分離した独立戦争の結果としてであり，またイギリスの植民地征服の結果としてである．大フランスが大イギリスに併呑されてしまった百年戦争のことは，すでに述べておいた．同じような方法で大オランダは，喜望峰とデメラがイギリスにとられたとき，重大な損失をこうむった．もっともいまでも，1900 万をくだらぬ人口をもつすばらしい植民地ジャヴァを維持していることを考えれば，大オランダは存続していると言える．大スペインと大ポルトガルの没落は，今世紀に，まだわれわれのあいだにいる多くの人たちの生きている時代におこった．われわれが諸事件を，それがいまひきおこしている興奮によってではなくて，むしろそれから確実におこる結果によって判断するなら，われわれはこの事件を世界の歴史におけるもっとも驚くべきものの一つと呼ぶべきであろう．というのは，それは南アメリカおよび中央アメリカのほとんど全体の独立の生活の始まりだからである．それは，主としてこの世紀の 20 年代におこなわれたもので，一連の蜂起の結果であった．そしてわれわれがその起原をさぐってみると，それはスペインとポルトガルがナポレオンの侵入からうけたショックからおこったものであるということがわかる．そこで大スペインと大ポルトガルの没落と南アメリカの独立とは，事実上，ナポレオンの功業の唯一の重要

な結果ではないにしても，もっとも重要な結果の一つだったのである．

これらすべての強大な革命――それについてはおそらく読者のうち少数の人しかご存じないであろうが――の結果として，ヨーロッパの西方諸国家は，イギリスをのぞけば，本質的にはふたたび新世界と切り離されてしまった．このことは，もちろん，大ざっぱに言って正しいにすぎない．スペインはまだキューバとポルトリコをもっているし，ポルトガルもなおアフリカの広大な領土をもっており，フランスは北アフリカに新しい植民地帝国をきずこうとしはじめている．それにもかかわらず，世界におけるこれら４国家の地位は，本質的に変化している．それらは，かつてコロンブスが大西洋をよこぎるまえにそうであったように，ふたたび主として純ヨーロッパ的な国家となっている〉（62 － 64 ページ）．

〈こういうわけで，われわれは,17 世紀は，まして 18 世紀は,新世界が特殊的な方法でヨーロッパ的制度の五つの西欧国家と結合した時期である，と考える．この結合は，この時代のヨーロッパのすべての戦争と協定，ヨーロッパのすべての国際関係を変形し，規定している．このまえの講義のなかで，私は，われわれがヨーロッパだけを考察しているかぎり以前の諸世紀のイギリスとフランスとのあいだの闘争を理解できないこと，交戦国が世界的強国，大イギリスと大フランスであること，を指摘しておいた．ここでは，われわれは同じ時期にはオランダ，ポルトガル，スペインと書いてあるところはいつも大オランダ，大ポルトガル，大スペインと読まなければならない，と強調しておく．さらに私は，この状態がいまや過ぎさってしまったこと，スペイン帝国，本質的にはポルトガルおよびオランダ帝国も，フランス帝国と同じ道をすすんできていること，を注意しておきたい．だが大イギリスはいまでも存続している．われわれは，この帝国の歴史的起原と性格をこう理解している〉（64 － 65 ページ）．

〈われわれは，主としてわれわれの植民地によって，二つの大きな戦争にまきこまれたが，ここで決定的な決裂をひきおこしたのは，植民地にたいするイギリスの圧力であるよりも，むしろイギリスにたいする植民地の圧力であった．われわれが植民地に課税したのは，われわれが植民地のために背負った負債を支払うためだったのであり，そしてわれわれが，植民地のために北アメリカにおけるフランスの権力を絶滅してやって，われわれ自身，自分の植民地がわれわれなしでもやっていける状態においたことを知ってにがにがしくおもっても，それは不当なことではないのである〉（75 ページ）．

〈中世にはイギリスは，経済的見地からみて先進国ではなくて，大体において後進国であった．重要な商業国では，イギリスは軽蔑されていたにちがいない，ちょうどイギリスそのものがいま，イギリス自身の商業および銀行制度とくらべて，ドイツのそれどころかフランスのような国々との商業および銀行制度を旧式なものと見ているように，中世にはイタリア人は，イギリスをそう見ていたにちがいない．イタリア人は，都市生活，広範な商業関係，実務上の敏感さをもっていたので，イギリスやフランスを，時代の主要思潮からずれた旧式な農業的で封建的な国のなかに入れてきたにちがいない〉（96 － 97 ページ）．

〈西ヨーロッパの５大海上国のあいだの新世界のための<u>競争</u>，これこそ 17 世と 18 世紀の歴史の大部分を要約する定式である．これはわれわれが個々の国家の歴史だけを研究しているかぎり見落とされる一般化の一つである〉（108 ページ）．

〈どういうふうにしてわれわれはインドを征服しようとしたか？　この征服はインドとわれわれとの貿易の直接の結果ではなかったか？　そしてこれこそ，17 世紀と 18 世紀の

イギリスの歴史全体を支配している法則，すなわち，この時期をつうじて貿易がまったく当然にも戦争に導き，戦争が貿易を促進するという，戦争と貿易との緊密な相互依存の法則をしめすもっともきわだった実例である． 18 世紀の戦争が中世の戦争より比較にならないほど大規模で負担になるものであったことはすでに述べておいた． 17 世紀の戦争も，それほど大きくはなかったにしても大きかった．しかし，まさにこの世紀に，イギリスはいよいよ商業強国へと成長していったのである．イギリスは，この時代には実際，商業的になるにつれてますます好戦的となった〉（120 ページ）．

〈じっさい，大イギリスを建設した人々の態度を是認することは,容易なことではない〉（145 ページ）．

〈おそらくみなさんは，犯罪に由来したとしても，それが繁栄することをわれわれが期待したり要望したりしてもよいのか，質問されるであろう．しかし，歴史にあらわれる神は,ふつう，そのように判断しはしない．歴史は,一世代の不法な征服が，かならず，あるいはおそらく，つぎの世代にはふたたび失われてしまうにちがいない，とわれわれに教えているわけではない〉（146 ページ）．

〈17 世紀には，わが植民地帝国そのものが徐々に大きくなったのと同じように，奴隷売買にわれわれが参加することもまた徐々に多くなった．それはユトレヒト条約によっていわば是認され，《イギリスの政治の中心目標》（この言葉はレッキ氏から借りてきたもの.《18 世紀イギリス史》，第Ⅱ巻,13 ページをみよ）となった．このとき以来われわれは奴隷売買に指導的地位を占め，われわれはこの奇怪でいとうべき蛮行で他の民族以上に手をよごしたのではないかとおもう〉

〈すでに述べたように，近代世界では距離が意義をいちじるしく失い，国家が従来よりもはるかに大きくなる時代がやってきた徴候がある〉（308 ページ）．

要約

1580 年まで新世界は、スペインとポルトガルの所有となっており、スペインはアメリカを、ポルトガルはアジアを主として眼中にいれていた。オランダ人は 1595 年から 1602 年までの 7 年間に帝国建設のための広範な闘争をはじめ、フランスとイギリスがこれにつづいたのは、17 世紀の初年であった。

こうして、 18 世紀と 17 世紀に、これらの五つの西欧国家のどれもが新世界に自分に属する帝国を持った。西ヨーロッパの５大海上国のあいだの新世界のための競争，これこそ 17 世紀と 18 世紀の歴史の大部分を要約する定式である。

しかし、19 世紀には、大西洋のかなたの植民地が本国から分離した独立戦争の結果として、またイギリスの植民地征服の結果として、新世界でのこれら五つの国家の闘争は終わった。

イギリスの膨張については、各自が読んで下さい。